【 読売新聞　令和 3年 1月15日 】

豚熱 防疫手引を改定

高崎市の養豚場で家畜伝染病「CSF（豚熱＝豚コレラ）」が発生したことを教訓とし、県は今年度中に防疫措置のマニュアルを改定する。約5900頭の豚の殺処分では混乱が生じたこともあり、埋却予定地のデータベース化を進める。野生イノシシの感染は拡大傾向にあり、ワクチン接種の強化も図っていく。

殺処分した豚を埋めるための溝を掘る作業員（2020年9月、高崎市で）＝県建設業協会提供

県、今年度中に 定期演習■埋却予定地の登録

昨年9月に高崎市でCSFが確認された直後、県職員、県建設業協会員、自衛隊員らのべ2558人が、防疫や殺処分した豚の埋却などに奔走した。県が作業の従事者を対象にアンケートを実施したところ、「指揮系統が不明確だった」「防護具の着脱に手間取った」といった計721件の意見が寄せられ、課題が浮き彫りとなった。県は今後、発生現場に指揮官を常駐させることに加えて、防疫演習も定期的に企画することも決めた。

県建設業協会高崎支部に加盟する建設会社は、豚を埋める溝の掘削を担った。深さ4㍍の溝4本（長さ計約270㍍）が必要となり、すべての豚を埋却するまで、夜通しの作業が5日間も続いた。

養豚場は丘陵地にあり、農家の報告に基づいて設定された埋却地は土壌が軟らかく、重機による作業に適していなかった。同支部は重機が転倒しないように敷く鉄板を用意し、場所も変更した。関口功支部長(62)は「心身ともに過酷な作業で、豚の鳴き声は今も耳についている。二度と起きてほしくないが、備えておくことが重要」と指摘する。

県は各養豚場周辺の埋却予定地を調査した上で、データベースに登録する。

農林水産省は、感染した野生イノシシのウイルスが野生動物を介して豚舎に運ばれた可能性が高いとする調査結果を公表したが、県内では野生イノシシの感染確認が相次ぐ。昨年10月以降も渋川市、沼田市、みなかみ町など10市町村で感染した計33頭が発見され、有数の養豚地域である前橋市でも初確認となった。県家畜防疫対策室は「危機感が高まっている。ワクチン接種を強化し、各農家に飼養衛生管理基準の順守を求めていく」としている。